教員の協働を基盤とした教育実践－統合カリキュラムの推進力として－

田場由紀（老年保健看護）

科目の新設の経緯と実際

保健看護包括実習は、保健看護上の看護職の役割が拡大する中、統合カリキュラムとして看護師教育と保健師教育の重複を避け、ミニマム・エッセンスとしての実習体験を 2 年次の学生に提供することをめざしている。同時に、本学の専門科目を担う広域・基盤看護科目担当領域と生涯発達看護科目担当領域の 6 領域が協働で実習目標の達成に挑む初めての試みでもあった。

新カリキュラムの運用が決定し、各領域の保健看護包括実習責任教員は、1 年間の準備期間に実習施設と学内調整に多大な時間をかけ、学生の動きや反応をそれぞれ想像しながら、共通の記録様式の検討や学生の体験を促す環境づくりについて話し合いを重ねてきた。

実際の展開では、オリエンテーションは入念に行いつつも、学生にはこれから作り上げる科目であることを伝え、3 ヵ月にわたる実習期間について決まっていないことがあること、予測できていないことがあることを伝えた。そして、わかりにくいことは積極的に質問することを依頼した。教員はオリエンテーションで伝えたことも繰り返し学生に伝え、教員間の連絡は密に行い、効率化・合理化をめざさず、一つ一つの課題に一つ一つ対処することを心掛けた。

十分とは言えない状況の中、教員の努力と学生の協力によって 1 年目は問題を抱えながらも最後まで走り切った。予測していなかったのは、繰り返し遭遇する台風への対処と、それに伴う補習実習の日程が確保しづらいこと、学生の体調管理や学生の不満への対応であったが、いずれも教員の入念な調整と打ち合わせ、丁寧な実習施設との調整によって乗り越えることができた。

学生の学びについては、やはり台風のために発表会を開催できなかったが、学生が作成したプレゼンテーション資料を報告書として構成しなおし、学生と教員とで共有した。最終レポートは、多様な看護の場や生活者との出会いを通して、看護の共通部分をつかみ取り、「看護とは〇〇である」と自ら定義を試みるものもあった。また、看護の場ごとの違いをつかみ取り、その特異性について論述しているものもあった。これらは、学生がさまざまな生活者とかかわりながら自ら言語化したものである。この経験がこの後の教育において学生を支えるものになることを期待する。

新カリ完成（2025）年度に向けて

多様な場を通して様々な生活者と出会い、学生自身が看護の共通部分について考えることを通して、看護の本質に迫る可能性が期待できる科目であった。学年進行の早い段階で看護についての言語化を試みることは、早期体験実習に続き、看護観の形成に影響を与えると考える。また、本学の段階別実習としての位置づけがより明確になった。学生は 1 年次の早期体験実習や島嶼・国際保健看護実習を経て、2 年次の保健看護包括実習で看護の定義を試みることで、この後の個別支援を通して自分なりの看護観に出会えると考える。